クリード
チャンプを継ぐ男

PRODUCTION NOTES

アドニス
「ある偉大なボクサーがこう言った。
『大事なのはパンチの強さじゃない。
どんなに打たれても――前に進み続けることだ』」

世界クラスのボクサーになるための絶対条件は強さと決意だ。ボクサーの血を受け継いでいるとはいえ、アドニス・ジョンソンにはさらに何かが必要になる。それがロッキー・バルボアだ。生まれる前に死んでしまった父、偉大なる王者、アポロ・クリードの影を抜け出し、光の中へ出ていくために、アドニスはロッキーをリングへ連れ戻さねばならない。
その元王者は長い間ボクシング界から離れていたが、アドニスを見ていると、自分が若い頃、生意気な成り上がり者と思われていたことを思い出す。アドニスから何度も熱心に頼まれたあとで、ロッキーは彼のやり方で鍛えることを条件に、トレーナーを引き受ける決意をする。
1976年の『ロッキー』で始まった究極のサクセス・ストーリーを再び描き直そうという挑戦は、本作の監督・脚本のライアン・クーグラーがまだ大学の映画学部在学中に考えたものだった。「僕は父親と『ロッキー』映画を観て育った。僕らの定番の父子タイムだったんだ」と彼は言う。「ロッキーは誰もが――アクション映画ファンでも、ドラマのファンでも、どうしようもないロマンチストでも、ごく一般的な映画ファンでも――共感できるキャラクターだよね。それは『ロッキー』映画にはどんな人でも楽しめる要素が入っているからなんだ」
そしてアドニスがロッキーを説得してボクシング界に復帰させる前に、クーグラーはまず、ロッキーというキャラクターに取り組むことについてシルベスター・スタローンからの承諾と、彼が再びグローブを手にするという言質を取りつけなければならなかった。本作では製作も兼ねたスタローンは、40年近くにわたって6本の「ロッキー」映画で、映画史上もっとも名高く、愛されているキャラクターのひとつを演じた。彼はこう語る。「ロッキーが人々に残した印象の大きさに、私は当惑すると同時に圧倒されている。だからこそ、私はこのキャラクターを損なってはいけないという計り知れない責任をつねに感じてきたんだ。ライアンが、アポロ・クリードの息子アドニスというキャラクターの構想をもって訪ねてきたとき、私は、これはすごい、このフィルムメーカーはこんなに若いのに、私たちが何十年も前に始めた作品にこれほどまでに魅了されているなんて、と思った。私はすごく興味をそそられたことを認めるよ」
クーグラーは、この映画界の“アイコン”と初めて会ったときのことを思い返しながらにっこりする。「彼がちょっと不安げなのが見てとれた。なにしろ僕は、その当時はまだ一本も長編映画を作っていなかったからね。たぶん彼は、『この俺に「ロッキー」映画を撮りたいと言ってくるなんて、この若造は何者だ？』と思っていたんじゃないかな。でも同時に、彼がどうすれば映画として成立させられるか、あらゆる可能性を考えているのも感じたよ」
クーグラーは、そのアイデアを監督第1作の『フルートベール駅で』の撮影中に、主演のマイケル・B・ジョーダンにも話した。ジョーダンはこう思い返す。「ライアンはほんとうに才能のある、頭がきれる人で、彼とのコラボレーションは楽しくてたまらない。だから、この作品のことを初めて聞いたときも、すごく面白そうだと思ったし、実現するなら絶対にやりたいと思ったんだ。その後しばらくして、現実味を帯びてきて、僕もより深く関わるようになるにつれ、僕はその状況を、『これは責任重大だぞ。ロッキーが40年かけて築いたものを受け継ぐことになる』と考え始めた」
その大仕事に取りかかったクーグラーが本作で目指したのは、最初のころの「ロッキー」映画の骨太で伝統的なスタイルを連想させながらも、現代的な、この作品ならではの個性をもつ作品にすることだった。そして、「ロッキー」シリーズのキャラクターたちを損なわないこと、（第二次世界大戦後の）ベビーブーマー世代と新世紀世代のギャップを乗り越えられる映画にすることが、クーグラーにとって重要だった。それは、きちんと作れば、この映画がどちらの世代も、そしてその間の世代も同じように惹きつけられると分かっていたからだ。
クーグラーはストーリーを考案し、親しい脚本家アーロン・コビントンと共同で脚本を執筆した。「ライアンと僕は南カリフォルニア大学の映画芸術学部に入った初日に出会った」とコビントンは言う。「僕らは似たような環境で育ち、興味があることも似ていて、ほとんど初日から組んで映画製作に取り組み始めたんだ。セットで助け合い、アイデアを出し合いながら。ある日、彼が僕に、子供のころ、『ロッキー』シリーズを観ていたかと訊ねた。もちろん何度も観たと答えたよ。すると彼は、『あのストーリーを、アポロ・クリードの息子を主人公に続けたらどうかな』と言った。ライアンがストーリーに対して本物のビジョンをもっていることが分かったので、僕はすぐに乗ったんだ」
クーグラーにとっての“ロッキーの儀式”は、彼が父とともに過ごした少年時代に遡る。「僕はスポーツをよくやっていて、父はアメフトや格闘技やバスケットの観戦に僕をよく連れ出したんだ。僕が大きな試合を控えていたときは、気分を高揚させるために一緒に『ロッキー2』を観たものだよ。あの映画が僕がロッキーというキャラクターとストーリーを知ったきっかけだった。父と僕は最終的にはシリーズ全作を一緒に観て、僕は父を通してあのストーリーに夢中になったんだ」
ロッキー・バルボアのストーリーをスタローン以外の脚本家が書いたのは今回が初めてだ。それは、2人のベテラン・プロデューサーたちにとって懸念材料になりえた。それぞれが製作会社をもち、本作では“チャートフ・ウィンクラー”という旗印のもとで製作を務めたロバート・チャートフとアーウィン・ウィンクラーである。彼らが製作した『ロッキー』はオスカー10部門にノミネートされ、作品賞を含む3部門で見事受賞した。チャートフは今年亡くなり、本作は彼に捧げられている。「私たちは皆、『ロッキー・ザ・ファイナル』で有終の美を飾ったと思っていた。とても評判がよかったしね」とアーウィン・ウィンクラーは語る。「まさか、まったく新しい形でこのストーリーを続けるアイデアをもつ若者が現れるとは思いもしなかった」
同じく製作のチャールズ・ウィンクラーは、家族とともに「ロッキー」シリーズを観て育ち、6作目の『ロッキー・ザ・ファイナル』では製作とセカンド・ユニット監督を務めた。彼はこう語る。「ライアンのアイデアはとてもしっかりしていたので、私たちは皆、これこそがロッキーのストーリーを新しい方向へ導き、新たな

世代に紹介する方法だと納得した。バトンが渡されるのを見守るのはすばらしい気分だよ」
ウィリアム・チャートフも同じく「ロッキー」シリーズを観て育った。彼の父、故ロバート・チャートフは同シリーズを製作し、ウィリアムは４作目と６作目でスタッフに加わり、６作目では製作も務めた。そして本作では父子で製作を担当した。「ロッキーは私たち父子にとって大きな意味をもっており、ライアンと彼のお父さんにとってもあのシリーズが非常に意味深いことを知ったので、まず彼に対して私たちは強い共感を抱いた」とウィリアムは語る。「そして、ライアンが考案したキャラクターは、父親の跡を継ごうとしている若者で、父親の水準、父親が遺したものにふさわしい人間になろうとする。それは誰にとってもとてつもない重荷だが、彼の場合は生まれる前に父親が死んでしまったという事情が加わった。これは、観る者を惹きつけずにはいられない個人的な旅を追った奥深いストーリーなんだ」
「私たちはライアンのアイデアを聞いて驚いた」と語るのは同じく製作のデイビッド・ウィンクラー。「どの『ロッキー』映画にも、アポロに非嫡出子がいるなんて話は一度も出てこなかった。つまり、ライアンは既存の設定からキャラクターをスピンオフさせたのではなく、完全に新しいキャラクターを考え出したんだ」
ボクシングの神からの贈り物、ボクサーとしてのDNAをもつ若者。アドニスがその天の恵みをひとつの能力として磨き上げる手助けをできる者として、元王者であり、亡き父の親友だった男以外にふさわしい人間がいるだろうか？　アドニスが生まれる前に死んでしまったにもかかわらず、彼はずっと、父親の存在を息苦しいほどに感じながら生きてきた。今、ロッキー以外に、彼がキャリアを築く手助けができ、しかも、その父親のことを教えてくれる人物がいるだろうか？
クーグラーはこう語る。「アドニスには父親も、父親代わりの存在も、一度もいたことがなかった。僕は、そんな若者に年長の男として手を差し伸べるのはどんな感じなのかを探りたかったんだ。ロッキーにはトレーナーのミッキーがいた。だからロッキーにもそれは理解できるはずだ。スポーツのコーチやトレーナーというのは、若いアスリートにとっては親のような存在になりうるからね」
ボクシングの世界に復帰するつもりはなかったロッキーは、その名を使いたがらないとはいえ、もうひとりの“クリード”が目の前に現れるとは予想もしなかった。だが、“ドニー”と呼ぶようになったアドニスをいったん自分の人生に迎え入れると、さらなる驚きがロッキーを待っていた。ドニーは、「一緒に闘おう」と、ついに見つけた師であり、“おじ”であり、友であるロッキーに向かって言う。だが、自分があとどれだけ戦うのかを決めるのはロッキー自身だ。
全編がペンシルベニア州フィラデルフィアおよびその周辺で撮影された本作は、ロッキーのストーリーが始まった街に観客を再び誘いつつ、長年のファンに新しい代の世界を見せていく。

アドニス
「俺のどの動きも、どのステップも、親父と比較されることになる」

ビアンカ
「あなたはアポロの息子。なら名乗って。あなたの名前よ」

ロッキー・バルボアは、ジムの鏡の前でアドニス・ジョンソンにこう諭す。いちばん手強い敵は試合の対戦相手ではなく、この鏡の中で自分を見返している自分自身なのだと。ロッキーはそれを、彼自身のボクシングと人生から学んだ。若いアドニスは、ボクシング史上最強のボクサーのひとりと見なされる有名な父親の呪縛から逃れるために戦っている。それを知っているロッキーは、ボクシングは肉体的である以上に精神的なスポーツであることを彼に教えなければならない。アドニスは、自分で名を上げられる力があると思っているかもしれないが、果たして、その心も父の名に恥じない人間になっているのだろうか？
監督のライアン・クーグラーはこう語る。「僕はアポロ・クリードの家族のその後を追いたかったんだ。『ロッキー』シリーズでとくに好きなキャラクターだし、カール・ウェザースの演技は驚異的だった。彼はあのモハメド・アリと同じような自信をもって演じていたんだ。僕はアポロの知性、そしてつねに目の前に提示された自分の運命をしっかりと掌握している様子が好きだった」
とてつもなく高いハードルを前にした新進ボクサーというキャラクターを演じたマイケル・B・ジョーダンは、アドニスについてこう説明する。「父親を知らずに育ち、母親も早くに亡くした彼は、自分が何者かという意識にずっと悩んで生きてきた。年のわりには小柄で、だが大口を叩くために、ケンカばかりしてしまうんだ。育ったロサンゼルスでは里親をたらい回しにされ、あまり自慢できないような“場所”にも何度も出入りしていた。そんなときに、メアリー・アン・クリードに引き取られたんだ」
「突然、彼はすばらしい“場所”で暮らし始めた」とジョーダンは続ける。「だが心の中では、そこも自分自身の“場所”にはならなかった。彼はまだ、自分が誰なのかがよく分からず、吐き出さずにはいられない何かを抱えたままだった」
「ロッキー」シリーズに夫アポロとともに登場したメアリー・アンを本作で演じるのは名優フィリシア・ラシャド。彼女はこう語る。「メアリー・アンはアドニスを見た瞬間に、夫の息子だと分かるの。怒りをためこみ、精いっぱい勇ましげに見せている小さな体、なんとも可愛らしいけれど、世の中に腹を立てている姿。彼女には彼が理解できるのよ。だから彼女はアドニスを家に迎え入れ、わが子として育てるの。夫の分身ということは、自分の人生の一部でもある、というのが彼女の考え方なのよ。彼女は失ったその部分をずっと恋しがっていたから」
「メアリー・アンはアドニスに安定した生活の場を与え、教育を受けさせ、彼がよりよい人生を送り、世の中をもっとよく理解できるように後押しした」とジョーダンは付け加える。「それでもなお、彼の心には埋めきれない穴があり、彼はそれが何かを見極めようとする。ボクシングをしているとき、彼には物事が理解できるんだ。生きていると感じ、これこそ自分がやるべきことだとしっくり思えるんだよ」
アドニスの苦しみのひとつは、非嫡出子であるという出生に起因するとジョーダンは言う。「その事実が彼に重くのしかかっていて、彼はそれを隠したがるんだ。自分のすべてを受け入れなければ、成長し、自分自身を見つけることはできないということを彼はまだ分かっていない。彼の旅は、ほんとうに長い間、恥ずかしいと思っていた部分を受け入れるための旅でもあるんだよ」
「マイケルと僕は、アドニスがためこんでいる怒りについて話し合った。アドニスはそれをうまく言葉で表現できないんだが、肉体的にギリギリに追い詰められると吐き出すんだ」と語るクーグラーは、こう付け加える。「人は得意なことをやりたがるよね。彼はボクシングにものすごい才能がある。自分で意識しているかどうかは別にして、彼は父親とつながろうとしていて、ボクシングをやっているときにいちばん父親に近づける気がするんだ」
クーグラーは、ジョーダンがこの役に必要な過酷な肉体的なトレーニングをこなす一方で、アドニスの内面の微妙な葛藤を掘り下げるであろうことを疑わなかった。「僕はもしこの映画をほんとうに作ることになれば、マイケルにアドニス役をやってほしいと思っていた。彼は才能豊かで、とつてもなくプロ意識が高く、徹底的にやり抜く男なんだ。そして自分の仕事にすごく誇りをもっている。彼が何かに興味をもったと知ったら、一緒にそれをやりたいと思いたくなる俳優なんだよ」
「ライアンはとても謙虚で、注目されるなんてまっぴら。誰かが彼のことを褒めるのを聞いたり、直接言われたりするのをすごく嫌がるんだ」とジョーダンはにっこり笑いながら暴露する。「でも実際、彼にはすばらしい才能があり、あらゆることに優れているんだ。とても正直だし、そのシーンで観客が共感できるまさにこれだという瞬間を俳優が見つけ、生命を吹き込めるようにいつも助けてくれる。僕らは初めて組んだ作品で意気投合したので、彼とまた組んだことによって、僕は俳優

と監督の関係、意思の疎通の大切さを痛感できたよ。それがうまくいけば、撮影のプロセスがずっと楽になる」
さて、ロサンゼルスの高級住宅街ボールドウィン・ヒルズのクリード邸で暮らしながら、ボクシングをするために国境を越えてメキシコまで行く日々をやめたいと思っても、ロサンゼルスでは、メアリー・アンに対する遠慮から、アドニスを鍛えてくれるトレーナーはいない。となれば、次にやるのはこれしかない。彼は快適な暮らしを捨て、フィラデルフィアへ、そしてロッキー・バルボアのもとへ向かう。
「アドニスは、ロッキーはアポロの親友だったので、自分が経験していることを理解できる唯一の人物かもしれない、そして、ボクサーとしてのアポロとの経緯からも、その息子を喜んで鍛えてくれるのではないかと思うんだよ」とジョーダンは説明する。「でもそうはいかないんだ」
ロッキーは、自分はあの世界へ戻るつもりはないことをはっきりさせる。ジョーダンはこう語る。「ロッキーは、父親がアポロ・クリードだからといって、息子にも世界王者になる力があるとは限らないと言う。そうなるには大きな努力が必要になると」
だが、それまで自分ひとりで練習してきたアドニスは、努力なんてなんでもない。彼はいつでも厳しいトレーニングを始める心構えができている。ロッキーのような男には、アドニスの覚悟のほどがはっきり分かるので、彼は不安を抱きつつも、アドニスのトレーナーを引き受ける。
「時の流れがどんなふうにロッキーに影響を及ぼしたかということに僕はとても興味があった」とクーグラー。「あれだけ英雄視され、ありとあらゆる肉体的試練を耐えられた人物が、年をとってどんな変化を遂げたのか……」。クーグラーはロッキーの現在の状況を、彼の最初のトレーナーであるミッキーの状況と重ね合わせる。ミッキーはクーグラーにとって、やはりお気に入りのキャラクターだ。「『ロッキー』でミッキーが登場したとき、僕は、彼の家族、妻、子供たちに関して何の説明もないことが興味深いとつねづね思っていたんだ。彼はただミッキーであり、ジムを運営し、ボクサーたちがいて、それだけだ。そして今回のロッキーも、かつてのミッキーのような状況にある。唯一の違いは、僕らはロッキーのこれまでを知っているという点だね。誰がもう彼のそばにいないかが分かる。だから、彼がただ人生の残りの時間を過ごしているのを見たとき、そして、彼にとって大変ではあるものの、この若者を迎え入れたのを見たとき、僕らは心により強く感じるものがあるんだよ」
ロッキー・バルボアというキャラクターを創り出し、これまで６本の映画で彼を演じたシルベスター・スタローンは、今回また予期せぬ機会を得て、すんなりと役に戻った。人生のこの時期をロッキーがどう生きているかを探りたいという熱意を抱いたのだ。「私から生まれたキャラクターとはいえ、自分がもっと彼のようだったらいいのにと思うよ」とスタローンは笑う。「彼はまさに忍耐強い人間の見本で、ほんとうに性格のいいやつなんだよ。すごく負けず嫌いだけど、彼は誇りを守るために戦うんだ」
「なにしろ、スライ（スタローンの愛称）ほどロッキーを熟知している人はいないからね。ボクシングについても、スポーツとして、そして映画でどう描くかということについて、彼は誰よりも詳しい。僕らは脚本を書きながら、『このシーンだとロッキーは何をするのかな？』と彼に電話してよく相談したよ。僕が何か思いついたら、最初に電話したのが彼だったし、彼のほうでも僕に真っ先に連絡してくれた。彼はほんとうに寛大だったし、すばらしい共同作業だった」とクーグラーは語る。
「たぶんほとんどのスポーツもそうだろうけど、ボクシングは、80 パーセントは頭の中で決まる」とスタローンは推測する。「ロッカールームを出る前に負けが決まってしまうこともありうるんだ。だからこそ、いいセコンドというのは、その場で即断できる精神分析の力が必要なんだ。セコンドはボクサーの精神状態を安定させなければならない。セコンドというのは、そんなすごい役割を担っているんだよ。だから、ロッキーが進むべき道としてはすごくいいんじゃないかと思ったんだ。ボクサーとしての長年の経験を、この若者に生かすことができるんだからね」
架空のストーリー上でも、現実でも、長い間ボクシング・アリーナに親しんできたスタローンは、何がボクサーの闘争心に火をつけるのかを検証する機会が豊富にあった。「やる必要がないのになぜ戦う？　何がボクサーを駆り立てる？　ああいう形で自分に試練を課したがるなんて、かなりユニークな性格だよ。ロッキーにしても、ふだんはとても穏やかなのに、リングに上がると原始的な何かにスイッチが入る。快適な場所からあえて自分を押し出し、ほとんどの人がやらないような究極の直接対決で自分自身を試すということなんだよ」
クーグラーは、ロッキーとアドニスの師弟関係だけでなく、彼らの状況がよく似ている点もどうしても見せたかった。一方はかつて前途有望だった男であり、もう一方は、今、まさに前途有望な若者であるという点だ。「シリーズ１作目の『ロッキー』で登場したときのロッキーは、とても孤独な男だった」とクーグラーは語る。「彼はボクサーとして身を立てようとし、エイドリアンとの関係を育てようとしていた。ポーリーという親友はいたが、夜になれば家で独りだ。そして努力の末、彼は人生ですべてを手に入れたんだが、今また、最初のように独りぼっちになっている。そこへアドニスが現れ、ロッキーは彼の中に最初の自分自身を見る。何も持っていなかったが、将来があった自分の姿を」
スタローンは、ロッキー自身の山あり、谷ありの人生にともなう感傷に加え、アポロの息子に対峙したときの気持ちをこう説明する。「アドニスに出会い、ロッキーには突然、アポロを失った悲しみが再びこみ上げ、その死に対する責任を改めて感じる。彼はそのことをちゃんと向き合ったことが一度もなかったんだ。今、彼はそれを思い出させられただけでなく、親友とそっくりなこの若者が自分をじっと見ている。しかもアドニスは危険な世界に入ることを望み、ロッキーに導いてほしいと言っている。ロッキーのほうはやりたくない。アポロの息子が傷つくことにまで責任を感じたくないんだ。だが、もし自分が引き受けなければ、ほかの誰かがやり、アドニスはほんとうに傷つくかもしれない。もしロッキーが全力を尽くせば、彼を守ることができるかもしれないし、何年も前の出来事の埋め合わせができるかもしれない」
そして本作でロッキーは、深刻な健康問題に直面するが、ちゃんと対処したがらない。もう家族がいないという理由からだが、アドニスの存在が、ほんとうにそうなのかと彼に考え直させる。そして、彼の中に闘争心が残っているのかどうかも。
さて、撮影の合い間にスタローンはジョーダンとすぐに打ち解けた。「マイケルは大好きだよ。すばらしい俳優だ」とベテランが褒める。「彼はすごく一生懸命だ。ひとつのシーンを撮り終え、うまくできたときでさえ、彼は 20 分後ぐらいに戻ってきて、『あのさ、何か心の中で煮詰まってきた感じなんだよね。もう１回、やってみてもいいかな？』と言ってくる。そしてそのとおり、さらにいい演技が飛び出すんだ。」
「大先輩からそう言われると、すごくうれしい」とジョーダンは言う。「正直なところ、共演者としても、個人的にも、スライとあれほど仲良くなれるとは思いもしなかった。だって彼はレジェンドだよ、考えただけでも怖気づいてしまう。でも彼はとにかく気さくな人なんだ。ライアンは監督として、俳優たちに自分でそのシーンを考えさせ、その本質を探らせる。スライと僕は、とても緊迫したやり取りのシーンがいくつかあって、僕らは互いを徹底的に追い込んだんだ。そして彼は、僕がほかの俳優との絡みでは到達しなかった感情のレベルにまで僕を押し上げてくれた。そんなこと、しばらくなかったんだ」
男社会のボクシング界を舞台にしながらも、本作は必ずしも男だけを描いているわけではない。ロッキーがエイドリアンと恋に落ちたように、アドニスも同じアパートに住むビアンカといい雰囲気になる。「印象の強い女性キャラクターが必要だということは最初から分かっていた」と脚本のアーロン・コビントンは言う。「というのも、誰もがエイドリアンを知っているからだ。ロッキーのことを考えると、自然に彼女が思い浮かぶ。ロッキーと同じく、アドニスにもあれだけの激しさを相殺するような存在、彼を地上に連れ戻すような誰かが必要だった」
そのビアンカはシンガー・ソングライターであるため、演じる女優は歌えることが条件だった。キャスティングは難航したが、最終的にテッサ・トンプソンがこの役を射止めた。クーグラーはこう説明する。「僕らとしては、スライ、マイケルと肩を並べる演技ができ、しかも、ビアンカが作る音楽をちゃんと歌えて、レコーディングできる本物のミュージシャンが必要だった。テッサは出演が決まるとすぐに、この映画の音楽を担当したルートヴィッヒ・ヨーランソンと協力して、この映画で使うために必要な曲作りを始めた。彼女はまさに適役で、ほんとうにすばらしかったよ」
「この作品のことを初めて聞いたとき、私が得た情報は “ライアン・クーグラーの次回作” ということだけだったの」とトンプソンは語る。「私はライアンのほかの作品、そして彼の人間性にすっかり心を奪われていたので、自分が演じられるような役があるかどうかも知らないのに、その “次回作” にどうしても出たいと思ったのよ。

その後、脚本を読み、これが予期せぬ形で家族を見つけるすばらしいストーリーだと知り、人々が共感できるものだと思った。『ロッキー』映画があれほど特別なのは、あれがじつはボクシング映画というわけではなく、愛、自分を信じること、忍耐、粘り強さ、夢を追い続けることを描いていたからだと私はいつも思っていたの。そういう内容なら、ボクシングに興味があろうがなかろうが、誰でも支持できるんじゃないかしら」
アドニスのように、ビアンカもまた夢を追っている。「アドニスとビアンカ、このふたりは互いをとても好きなんだけど、自分の進むべき道と、それにはどんな努力が必要かを見極めようとしている最中なの」とトンプソンは説明する。「ビアンカはフィラデルフィアで活動するシンガー。この町には音楽のすばらしい歴史があるので、私はライアンと一緒に、ビアンカが芸術的にどんな影響を受けたかを探り、彼女ならどんなサウンドを創るのかを見つけようとしたの。地元のミュージシャンたちとも少し一緒に過ごしたわ。彼らにはステキな仲間意識があり、一緒にいるとすごく楽しかった。もちろん、マイケルと共演できたことも悪くなかったわね」
ジョーダンはにやりとする。「テッサは最高だよ。彼女とのコラボはすごく楽しかった。実際、仕事という感じはしなかった。そう思えるのは、ちゃんと現実に即したことをやっているいい証拠なんだよ。ビアンカは、自分自身の目標、道徳観をもっていて、とても強くて自立している。彼女はノース・フィラデルフィア出身で、ふだんからとても率直で遠慮のない態度をとる女の子なんだ。アドニスはそんな彼女にちょっと驚くんだけど、そこが気に入る」
「この映画で、ビアンカはまだ若いにもかかわらず、自信と率直さ、そして現実を受け入れる姿勢という、アドニスが惹かれる資質を見せる」とクーグラーは説明する。「彼女は自分を知っているし、自分が何を望み、どこへ向かっているのかも分かっている。それはすべて、アドニス自身がなんとかしようとしていることなんだ」
アドニスが自分のアイデンティティに悩んでいるとしても、それは家庭での愛情の欠如からではない。少なくとも、過去数年間は。少年のころにアドニスを更正保護施設から引き取り、十代から大人になっていく時期を一緒に暮らしたメアリー・アンはアドニスにとって母親と同じだ。
「才能ある若い人たちと仕事をするチャンスがあれば、私は逃がさないの。ライアン、マイケルとのコラボレーションに興味があったしね」とメアリー・アン役のフィリシア・ラシャドは言う。「それに、頭がよく、洗練され、堅実で心の広い女性は演じるのがとても楽しかった。メアリー・アンは夫をとても愛していた。その愛は、夫の無分別さを見逃すだけでなく、その結果として生まれた息子を自分で育てるほど深かったのよ」
「フィリシアはとても上品で優雅な女性で、どのシーンでも存在感がすごかった」とジョーダン。「じつは、彼女は僕自身の母親を思い出させる人なんだよ。そのおかげで、メアリー・アンに対する感情が自然にあふれ出たし、スクリーン上での関係を築きやすかった」
メアリー・アンは、アドニスのボクシングへの情熱を知り、その理由も理解するのだが、それでも彼が別の道に進んでくれたらと願わずにはいられない。だが、アドニスが家を出ると告げたとき、彼女は自分の願いはむなしいことを知る。「人間は誰でも、自分なりの道を歩くため、自分で道を選ぶために生まれてくる」とラシャド。「だからここでメアリー・アンは、『アドニスは自分が選んだ道をあきらめるくらい私を愛している？』ではなくて、『私はアドニスが選んだ道に進むことを認め、それが彼にとって重要だから、応援できるくらい彼のことを愛している？』と自分に問いかけることになるの」
「どんな人間関係でも、どんなコミュニティーの中でも、こういう複雑な感情は起こる。まさにリアルな問題だよ」とクーグラーは言う。「フィリシアは、家族に対してそれにどう向き合うかを見事につかんでいた」

ロッキー
「見下した奴らを思い出せ。夢をつかめ。その拳で、チャンプを目指せ」

本作でアドニスは３人のボクサーと対戦するのだが、そのいずれもが明らかに彼よりも格上だ。ライアン・クーグラーがそれらのボクサー役に起用したのは３人の本物のプロボクサー、アンソニー・ベリュー、アンドレ・ウォード、ガブリエル・ロサドである。
「マイケルがアドニスとしてリングに上がるシーンで、毎回彼が戦うのは本物のボクサーなんだ」とクーグラーは言う。「彼らはすばらしいアスリートだけど、実際のボクシングと映画用のボクシングとでは違いがある。（実際の）彼らのパンチはとても効率がいいんだ。彼らはカメラ映りがいいような派手な形ではパンチを繰り出さない。多くの場合、彼らの動きは速すぎてカメラでは捉えきれないんだ。だから彼らは、大きくパンチを繰り出すという、“見せる”ボクシングを学び直さなければならなかった。彼らにとっては新たに覚える技術だったし、マイケルにとってはとても危険だった。もし実際の力でパンチが命中すれば、ひどいケガをしてしまうかもしれないからね」
フィルムメーカーたちは、俳優たちの安全はもちろん、ボクサーたちにも危険がないように万全を期した。彼らは皆、現役のプロボクサーであり、撮影が終わりしだい、本物の試合で戦うことになっていたからだ。
イギリスのアンソニー・ベリューが演じる“プリティ”・リッキー・コンランは、ライトヘビー級タイトル保持者で、36 戦全勝、その内の 28 回がＫＯ勝ちという、無敗の世界最高 PFP ボクサー（パウンド・フォー・パウンド・ボクサー／階級別ではなく、全選手が体格的に同条件だと仮定した場合のランキング）。ベリューは、彼自身とコンランには共通点が多いと考える。「リッキーは僕と同じく、リバプール出身だし、サッカーでは、やはり僕と同じく、エバートンの大ファンなんだ。彼は成功を収めているが、成功する前の自分を決して忘れていない」
その“ふたり”が大きく違うのは、当然ながら、本作でのコンランの状況だ。「彼はなんとかうまくやっていこうと努力しているシングル・ファーザーなんだが、銃がらみの問題を起こしてしまう」とベリューは説明する。「そんなわけで、彼は多くの問題を抱えながら、なんとかボクシングに集中しようとする。監督のライアンのおかげで、刑務所行きが迫っているという精神状態にうまく入ることができた。僕は子供たちから離れるなんて考えられないので、それはとても怖いことだ。考えただけで胸が痛む。ライアンはその感情を僕から引き出してくれた」
十代のころからボクシングをやってきたベリューは、本作で製作を務めるケビン・キング＝テンプルトンから出演依頼の電話を受けたときは驚いた。「僕はてっきり、友達のイタズラだと思ったんだ。誰かがケビンになりすまして僕をかついだんだろうと。それで妻に頼んでインターネットでケビンを検索してもらったら、電話してきたのは確かに彼で、同じ声だったと言った。それでも僕は半信半疑だったけど、その後、ようやくケビン、チャールズ・ウィンクラーをはじめ、数人の関係者に会ったんだ。でも彼らが目指すリッキーを自分が演じられる自信がもてたのは、ライアンに会ってからだったよ」
「トニー（アンソニー）のカリスマ性といったらすごい」とクーグラーは言う。「僕はイギリスへは一度も行ったことがなく、彼のことはインターネット上で知ったんだ。僕はリッキー・コンランを、アドニスのいい引き立て役として描きたかった。リッキーはすごく厚かましく、ボクサーとして経験豊富で、自分というものに誇りをもっている。あらゆる点でアドニスとは正反対なんだ。リバプールで生まれ育ち、故郷から離れない。一方、アドニスは自分の居場所をいまだに探しており、ちょっと放浪者的なところがある。トニーはまさに適役だったよ」
スタローンはベリューの戦いぶりをすでによく知っていた。「トニーは生まれながらのボクサーだ。彼はパンチを受けたり、興奮したりすると、その目に攻撃性、脅威が表れる。それはふつうの人間の怒りではなく、野生的でどう猛なんだ。勝つためにはそれが必要なんだよ。ボクサーを駆り立てるのはそんな野生的な資質だということをちゃんと理解している人はめったにいない」
「『ロッキー』映画は、ボクサーたちが経験する多くのことを捉えており、それは単に肉体的な部分だけではないんだ」とベリューは語る。「シルベスター・スタローンのおかげで、ボクサーのありのままの姿――気高く、名誉を重んじ、正直で、紳士的――を人々に知ってもらうことができた。いや、もちろん、いろいろな映画に登場するようなたちの悪い連中も確かにいるけど、僕たちの多くは、言葉遣いが丁寧で、頭がよく、ウィットに富んでいるんだよ。どの職業でもそうであるように、

ボクシングにはさまざまな側面があり、スタローンは僕らの存在を世の中に知らしめてくれた」
さて、“プリティ”・リッキー・コンランとアドニスの試合は、コンランのマネージャー、トミー・ホリデイが、コンランの対戦相手を探しているときにロッキーに電話をし、実現する。強引なベテラン・マネージャーを演じるのはスコットランド出身の俳優グレアム・マクタビッシュである。
「トミーにとってリッキーは息子同然なんだ。彼はずっとリッキーの面倒を見てきたし、守ってやりたい」とマクタビッシュは言う。「リッキーはまもなく厳しい状況に直面するので、彼の名誉のためだけでなく、彼の子供たちの将来のためにも、それを乗り切るには大きな試合が必要なんだ。トミーには非情な面があるが、私は彼を悪人だとは思わないよ」
マクタビッシュは、役作りのためにしばらく一緒に過ごしたベリュー本人のマネージャー、ゲイリー・ディズリーについてこう語る。「ゲイリーからはマネージャーの役割を教わったよ。試合の前は、自分のボクサーにこれから耐えなければならない過酷な試練への準備をしっかりさせる。試合中の各ラウンド後は、ボクサーは３分間の戦いを終えたばかりで、それは非常に激しいので、中には一瞬で終わったと感じる者もいる。ボクサーには、顔を殴られてまでリング上で自分は何をやっているんだろうという疑問が本能的にわくので、マネージャーは彼に集中力を取り戻させなければならない。そしてすべてが終わったあと、マネージャーは、勝っても負けても、ボクサーをあの緊迫した精神状態から平常心へ引き戻すためにまた集中させて、無事かどうかを確かめるのが仕事だ。だから、試合以外でも守りたくなるのは無理もないことなんだ」
アドニスはいきなりコンランと対戦するわけではない。その前に彼は、それぞれ違う理由で、２人のまったく違うタイプのボクサーと戦わなければならない。まず、ロサンゼルスを離れる前に、彼はアポロ・クリードの本拠地だったデルファイ・ジムで、ダニー・“スタントマン”・ウィーラーと対戦する。31 戦全勝、ＫＯ勝ち 18 回という戦績をもつウィーラーは、世界第２位の PFP ボクサーだ。デルファイでは、かつてアポロを、のちにはロッキーをも鍛えた名トレーナーを父にもつ、トニー・“リトル・デューク”・バートンのもとでトレーニングしている。そのバートンを演じるのはウッド・ハリス、そしてウィーラー役は現役ボクサーのアンドレ・ウォードだ。
「僕は文字どおり、『ロッキー』映画を観て、あのサントラを聴いて育った」とウォードは言う。「ボクシング・シーンはもちろん大好きだが、ボクサーがリングに上がるまでどんなことをやらなければならないかという準備の描き方もとても気に入っている。人生のほとんどを費やしてきたことだから、ボクサーとして共感できるんだよ。僕がこの映画に参加したいと思った大きな理由のひとつは、ボクシング・ファンはふつう、ボクサーがリングの外で努力していること、浮き沈み、葛藤、ふだんの人生を見る機会がないという点なんだ。この映画ではそれをはっきり描いていて、よさも悪さも醜さもよく分かる。それに、監督のライアンは本物のボクサーを大勢参加させたので、さらに真に迫った内容になっているよ」
フィラデルフィアにやってきたアドニスは、すぐにレオ・“ザ・ライオン”・スポリーノに出会う。“イタリアの種馬” と呼ばれたロッキーの元本拠地、マイティ・ミッキーのボクシング・ジムでトレーニングしているフィラデルフィアきっての有望株だ。彼の父で現在のジムの経営者ピート・スポリーノが、新参者のアドニスに付けるニックネームは “ハリウッド”。似合ってはいるものの、どこか揶揄（やゆ）している感じは否めない。17 戦全勝、ＫＯ勝ち 12 回となかなか立派な戦績をもつレオは、アメリカの 2012 年オリンピック・チームの一員で、ライトヘビー級世界第４位の選手だ。ピートを演じるのは俳優のリッチー・コスター、期待の息子レオを演じるのは現役ボクサーでフィラデルフィア出身のガブリエル・ロサドである。
「フィラデルフィアにとって、ロッキーはとても大切な存在だ」とロサドは言う。「ようやくボクシング一本で食べていけるようになるまで、深夜勤務で働いたり、水道管の交換などをやったりと、ロッキーと同じような経歴をもつボクサーとして、僕はあの苦労が分かるし、共感できる。多くのボクサーたちが同じように感じているよ。だからこの映画に出演できるなんて、とてもうれしかった。僕はプロとしての２度目の試合でスタローンに実際に会っているので、撮影用のジムに行って、そこでロッキーとしての彼と共演できるなんて、すごくワクワクしたよ」
３人のプロボクサーたちは皆、ジョーダンがセットで見せた勤勉さとスポーツマンらしい激しい動きが自然にできることを口をそろえて称賛する。「マイケルはちゃんと宿題をこなし、時間をかけて役作りをしてきた」とウォードは言う。「実際、彼のパンチを２発ぐらい受けたが、本物に感じられた。彼とのシーンはすごく楽しかったよ」
ロサドもこう付け加える。「マイケルとはすばらしいコラボレーションができた。僕らは朝８時にジムに入って 12 時までトレーニングをし、その後、３時にまた戻ってきて２～３時間汗を流した。彼は僕らと同じようにトレーニングに時間をかけていた」
「マイケルは休むことなくトレーニングに励んでいた」とコンラン役のベリューも称賛を惜しまない。「彼は信じられないような体つきになっていたよ。すばらしいアスリートだ。ボクシングにとてもよく順応して、いい身のこなしでパンチをかわしていたよ。彼は自分を誇りに思っていい」
クーグラーはプロボクサーたちに加え、本作でロッキーがアドニスを鍛えるために雇うエキスパートたちを演じてもらうために、ボクシングの縁の下の力持ち数人も起用した。リカルド・“パッドマン”・マッギルは、ミット打ちの相手を務めるパッドマンを演じている。パッドマンの息子で、アドニスのスパーリング・パートナーのアミールを演じているのは現役ボクサーのマリク・バジール。ボクシングや格闘技界の伝説的カットマン（インターバルで選手の傷を治療する専門家）のジェイコブ・“スティッチ”・デュランは、フィラデルフィアきってのカットマン、“スティッチ” を演じている。また、運動競技用器材会社を経営するエルビス・グラントが本人役で出演。
そして「ロッキー」シリーズの伝統を受け継ぎ、実際のスポーツ報道界からもキャストに加わっている。解説者のマックス・ケラーマン、ジム・ランプリー、マイケル・ウィルボン、ジャーナリストのアンソニー・コーンハイザーとハナー・ストームらが出演しているほか、リングの中央でマイクを握るのは、名リング・アナウンサーのマイケル・バッファーである。

アドニス
「今まで誰も打ち方を教えてくれなかった」

ロッキー
「お前のパンチは本物だ。自分を信じろ。父親を超えろ」

踏み込め。打ち抜け。攻めろ。アドニスのトレーニングで、熱が入る若いボクサーの集中力を保つために、ロッキーはこの言葉を何度も繰り返す。そして当然ながら、アドニスがロッキーのペースでトレーニングを耐え抜くために、マイケル・B・ジョーダンはまずボクサーらしい体を作らなければならなかった。
「この映画のための体作りは、僕にとって１年がかりの準備になった」とジョーダンは明かす。「いくつかの作品の合い間にあちこちでゆっくりトレーニングを始め、その後、ようやく集中してトレーニングすることができたんだ」と語るジョーダンは、カリフォルニア州バーバンクのパワーハウス・ジムで、テクニカル・アドバイザー／ボクシング・トレーナーのロバート・セイルの指導のもと、映画の中でアドニスが練習するのと同じぐらいきっちり基本を学んだ。
「体はバッチリだし、いっぱしのアスリートのつもりでも、いざ、あのリングに上がると、まだ実際にやれるレベルまで程遠いことを思い知らされる」とジョーダン

は認める。
「僕らがひとつ、分かっていたのは、ボクシングをきっちり見せなければならないということだった」と監督のクーグラーは言う。「もしそれができなかったら、僕らは映画にダメージを与え、ファンを傷つけ、ボクシングで生活している多くの人たちに迷惑を与えることになる」
セイルとのトレーニングが始まったあと、ジョーダンによれば、「そのトレーニングは徐々にフィジカル・トレーナーのコリー・キャリートとのウエート・トレーニングに発展していったんだ。彼とは別の映画でも組んだことがあった」
キャリートはジョーダンのトレーニング・メニューだけでなく、栄養プランも作成した。「アポロ・クリードはかなり筋肉隆々だったが、僕はアドニスの体をもっとよく作ってみたかった」とキャリートは言う。「僕はいつも、誰かの体を彫刻に変身させるのが楽しみなんだよ」
「コリーとはまず、食事制限に取り組んだんだ」とジョーダン。「体を鍛えている人たちの多くは、自分の体に摂り込む食べ物の量と種類が、外見にどれだけ関係があるかに気づかない。コリーは僕に、砂糖、パン、パスタ、乳製品、チーズを制限した。禁止。絶対にダメ」
「そのうち、食事どきになると、マイケルが僕に電話してきて、『何を食べていい？』と聞くようになった」とキャリートは笑う。「最初のころ、僕に確認せずに何か食べたり飲んだりしないように徹底させた。彼が間違えるリスクを避けたかったからね」
ひとつ、はっきりした制限が何もなかったのは水だ。「僕は毎日５～６リットル以上の水を飲むようにしていた」とジョーダンは思い返す。「我慢して続ければいずれ、結果が目に見えてくるので、それがとんでもないワークアウトのメニューや、厳格な食事制限を守る意欲になるんだ」
クーグラーからは、縄跳びに重点的に取り組むよう指示が出た。いくつかの状況で、ストーリーに盛り込まれる要素だったからだ。「ライアンは、マイケルに縄跳びをすごくうまくなってほしかった」とキャリート。「マイケルには生まれながらのスポーツの才能があるので、翌日の達成目標を前の晩に彼に見せておくと、彼はすぐできるようになった。それはめったあることじゃないよ」
ジョーダンは両足のかかとを床につけた構え方をするため、「僕らはマイケルがリングでのフットワークを身につけるように、さまざまなトレーニングをやった。動き回ったり、飛んだり跳ねたり、バーピーという全身運動や基本的なプライオメトリック（筋力トレーニングの一種）をしたり。彼が短期間で本物のボクサーらしくなる必要があることを僕は知っていたので、そういうエクササイズで足の構えの弱点を克服しようとした」
ロッキーが長年の経験をアドニスに教えようとするように、キャリートはジョーダンにこう教えた。「体は頭がさせないことはしない。しゃべる前に考えるように、パンチを打つ前にも考えられる。そうすることで安全が守られる。自分に『お前ならできる』と言えば、できるんだよ。マイケルがトレーニングをやめたがった日もあった。そんなとき、僕は彼を見て、思い出させたんだ。『君の頭は先にやめてしまっている。頭に「やり続けろ」と言うんだ。君の体は頭が命じることしかやらないんだから』と」
キャリート自身、８年以上ボクシングをやっていた。フィラデルフィアへ向かう前にアドニスがそうだったように、昼間は働きながらだ。「僕にとってボクシングは初恋だった。かつて僕は出勤前に約 10 キロ走り、退社後にボクシングをやっていた。誰もがロッキーに憧れたんだよ。彼の勤勉さ、そしてやる気を出させる言葉が、僕にやり続けたいと思わせた。僕はしょっちゅう『ロッキー』映画を観ていたので、このような作品に実際に加われるなんて、呆然としてしまうよ」
そしてジョーダンの体ができ、撮影に入る準備が整うと、クーグラーと、スタント・コーディネーターのクレイトン・バーバーの出番になった。彼らはカメラで捉えるものすべてがリアルで、ボクシングとしてきちんと見えるように奮闘した。
「６歳ぐらいからスポーツをやってきたので、スポーツは僕が理解できる分野なんだけど、ボクシングにはあまりなじみがなかったんだ。だから勉強が必要で、脚本を書きながら、練習に通った。基礎を学ぶことによって、僕自身がアドニスの考え方ができるようになりたかったんだ。その後、スライが本格的なボクシングの要素を盛り込んでくれた。彼は僕らに試合のチケットを取ってくれたり、彼がずらりと揃えているボクシング関連の本をいつでも読ませてくれた。そしてクレイトンと彼のチームが、ボクシング・シーンに関わる全員が全力を尽くしていると感じられるように、そして、同時にちゃんとリアルに見えるようにしてくれたんだ」
バーバーにとって、すべてはストーリーから始まる。「初めてライアンと話したときも、僕らはストーリーの話しかしなかった。アクション演出のことではなく、ストーリーの話だけだ」とバーバー。「その後、僕らは“ロッキーの歴史”を検証し、この映画で創り出そうとしている世界のために、ボクシングの中に組み込みたい『ロッキー』映画ならではの特徴を探した。映画の中で試合は４回あり、そのどれもが、アドニスがたどっている旅の全行程の異なる部分を象徴しているんだ」
クーグラーとバーバーは、ジョーダンにマネできそうなボクシング・スタイルをもつ現役ボクサーを数人選び、手に入る限りの映像を見るように勧めた。「彼が選んだのは南カリフォルニアで活動するティモシー・ブラッドリーというボクサーで、マイケルにはとても参考になったようだ」とクーグラーは言う。
映画の中で、俳優のジョーダンが本物のボクサーたちと対戦することは、バーバーにユニークな難しさを提示した。「片や本物らしいボクシングを覚えようとしているボクサー役の俳優、片や演技でボクシングをすることを覚えようとしている本物のボクサー。彼らをうまく組み合わせる方法を考えるのは興味深いプロセスだったよ。というのも、同じリングに立ちながらも彼らが習得しようとしているのは、ある意味、正反対のことだからだ」と語るバーバーは、こう続ける。「ライアンとの初期のころの話し合いで、彼は、“暴れるようなバレエ”を目指したいと言った。それで僕はすぐにピンときたんだ。彼が望んでいるものがはっきり理解できたし、それがリング上で僕らが描くもののインスピレーションとなり、その実現のために頑張った」
「ボクシングを新鮮に見せるというのは、まったく別のレベルのプレッシャーだった」とクーグラーは認める。「クリエイティブ面では、『ロッキー』映画の本質を捉えながらも、観客が観たことのない新しいものを提供したかった。アメリカ文化の一部ともいえるこのキャラクターを違った観点で見せたかったんだ」
映画の中のスポーツに新しいひねりを模索しているときでさえ、「ロッキー」シリーズのほぼすべての試合でアクション演出をしたスタローンがセットにいるという利点は全員が感じていた。「ライアンの名誉のために言っておくが、私は、以前使った自分の演出案を彼に渡しただけで、それを分析して必要な情報を役立てたのは彼だ」とスタローンは言う。「彼には、こういう映画には実際は２本の映画が入っているということも話したよ。ドラマと試合。そして、映画の試合以外の部分で描かれるドラマと同じぐらいの濃さで、試合の中にもドラマを詰め込まなければならない。９分ぐらいの中にね。それはとても複雑で、手強い挑戦だ。だが彼は問題なくやってのけた」
クーグラーとバーバーは、撮影監督のマリース・アルベルティと密に連携をとり、通常、映画では観られないような視点でリング上を映し出せるアクション演出とカメラワークを選んだ。全編にわたり、とくに試合のシーンではステディカムが使われ、アドニスとレオ・スポリーノの対戦は２分間のシングル・テイクで撮影された。試合のシーンでは、観客が理窟抜きで没頭できる臨場感あふれるものにすると同時に、つねに安全面が最優先された。「僕らは安全なゾーンをしっかり維持し、ボディへのパンチの炸裂感を失うことなくカメラでしっかり捉えつつも、どのようにパンチを当てるかをとても慎重に決めた」とバーバーは説明する。きっちりやれば、（本物の力で命中したときと）同じインパクトで捉えることができるんだよ。“アクション（動き）”には必ず“リアクション（反応）”がある。アクションの強さを観客に印象づけるのはリアクションなんだ。それが映像上の見せ場であり、僕らが取り組んだのもその見せ場の演出だった」
クーグラーはこう付け加える。「僕たちは、観客が試合のその瞬間、リングの中にいるかのような感覚を捉えたかったので、円を描くように撮る方法を思いついた。だから、アドニスがロープを背にして、どこにも逃げ場がなくなったところをぐるりと回りながら、連続して寄って撮ったんだ」
360 度のショットを撮ることができる装置 Movi カメラ・リグを使ったことについて、クーグラーはこう語る。「ふたりのボクサーが打ち合いをしている間、僕らはロープの上を越えるようにして撮ったんだ。映画の中でわずか数秒のひとつのショットのためにお膳立てするにはすごく複雑だったので、そこまでやるのはとんでもないことではあったんだけど、僕としては効果的だったと思うよ。観客は臨場感を味わえるはずだ」
すべてのボクシング・シーンについて、バーバーがジョーダンにとくに注意したのは、“態度”だった。「アドニスの態度からは、彼が心に抱えているものが感じられる。だからマイケルには、どの動きでも確実にその態度を表すように言ったんだ。人が話すときに、言葉には意味があり、俳優はそれをキャラクターに合わせて表現する。

それと同じだよ。僕はマイケルに、『パンチはただのパンチではなく、意味があるんだ。そのパンチに込められた意味を表せ』と言った。そうすれば、それはキャラクター自身に表れ、観客は彼の葛藤を感じとることができる」

アドニス
「あんたが闘わないなら俺もやめる。一緒に戦おう」

ロッキー
「アポロはミッキーの死から俺を救ってくれた。
それ以上にお前に救われた」

監督のライアン・クーグラーにとって、本作の舞台をフィラデルフィアにすることは決まりきったことだった。すべてが始まった場所だからだ。そしてフィルムメーカーたちにとっても、撮影自体をフィラデルフィアでおこなうことは検討するまでもなかった。「ロッキーは、アドニスにとって、自分の過去と未来をつなげる存在だ」とクーグラーは言う。「彼の人生が向かう先はただひとつ、それはどこであろうとロッキーがいる場所だった。そしてそれはフィラデルフィアなんだよ。実際、『ロッキー』シリーズに登場した場所をたくさん使ったので、ファンはきっとあそこだと気づくと思う。でも、僕ら独自のものにするために新しい場所でもたくさん撮った」
クーグラーのクリエイティブ・チームには、衣装デザイナーのエマ・ポッターとアントワネット・メッサンが加わり、また、『フルートベール駅で』チームからは、編集のマイケル・ショーバーとクローディア・カステロ、美術のハンナ・ビークラーら数人が再結集している。
「ライアンは、映像的にどんなテーマにしたいかがとてもはっきりしていたの」とビークラーは言う。「だから、私は『ロッキー』映画を観直し、その中から 2015 年のこの映画に必要な部分をどういう形で融合させ、すべてをまとめるかを見極めたのよ。彼は、それをきちんと見せること、そして、フィラデルフィア、ロサンゼルス、リバプールという３つの異なる舞台を明確に描くという点で、私を信頼してくれたの」
本作の２大必須アイテムは、ロッキー像と、フィラデルフィア美術館のあの象徴的な長い階段だ。クーグラーは、それらを現代の街、そして今のロッキーに合うと彼が思う形で、映画の中に組み込んだ。そしてそこでの撮影は、まったく別の“事件”だった。
「スライでさえ、あの人混みにはちょっとびっくりしていたよ」とクーグラー。「僕らがあそこで撮影をした日、彼は心底感じ入ったという様子で、『みんながあの階段を駆け上がるなんて信じられない。どうかしてる』と僕に言った。でも実際、彼を見ると、みんな、どうかしちゃったんだよ。あっという間に通りが人でいっぱいになり、誰もがロッキーに対するように彼に話しかけてくる。ロッキーは架空の人物だけど、それを遥かに超えた存在なんだよね。あのとき、スライと一緒にあの場にいて、あの光景を見られて最高だった」
「私は日々の出来事につい夢中になって忘れてしまうけど」とシルベスター・スタローン。「フィラデルフィアへ戻り、あの街がいまでもこのキャラクターを愛してくれていることを目の当たりにできるなんて、ほんとうにすごいことだ」
マイケル・B・ジョーダンもこう語る。「あれはシュールだった。ファンからの歓声と愛情のすごさ。だって、美術館の正面に、この人物――架空のキャラクターとしてのこの実際の男――の像が建っていて、世界中から人々が集まってきて、像と並んで写真を撮り、彼の足跡をたどろうとするんだから」
さて、セットで「ロッキー」シリーズからの継続性を維持するため、美術のビークラーは必要なシーンに組み込めるように、数多くのセットや装飾関連要素を調べた。「すべての“ロッキー・アイテム”がロッキーの家の中でちゃんと描かれるようにしたかったので、いくつかの特定のアイテムについては、シリーズの中から見つけ出したの。例えば、この映画でロッキーの家の地下室にあるロッキー・マルシアノのポスターは、『ロッキー』では彼のアパートに貼ってあった。それに、エイドリアンの気配もあり、『ここは彼女が何かしたに違いない』と思える部分もあると思う。彼女が逝ってしまってから何年もたつのに、ロッキーは何も変えていないの。時が止まってしまったのよ。そういうちょっとしたことによって、私たちは観客にこの映画でロッキーの人生を確実に感じとれるようにしたの」
サウス・フィラデルフィアのある家がロッキーの家として撮影に使われ、ビークラーは、『ロッキー・ザ・ファイナル』での彼の家をヒントに作った。そして、それがうまくいったことが分かり、胸をなでおろした。「スタローンが中に入ってきたときはほんとうに緊張したわ。彼に認められることが大切だったから。彼は家の中を見回してから、『うん、この家はガラクタだな。すごくいい』と言ったの。そのとき、私たちは間違ってなかったと分かったのよ」
本作において、世代的、そして家族的なテーマを喚起するため、ビークラーが考えたロッキーの家はこういうものだった。「ともすれば、ものすごく悲しい感じになりそうだけど、同時に居心地がよくて温かい場所。ただ、もうちょっとだけ愛が必要な感じにしたの。アドニスが入ってきたときに、家を開放的にできるようにね。そのときには、ロッキーの家は少し軽く、少し明るくなり、あの洞窟のような雰囲気が消え始める。そしてやがて、彼らはキッチンに集まるようになり、ある意味で急ごしらえの家族のようになるので、キッチンがこの家の象徴になる」
ロッキーは経費を抑えて生活してきたが、アドニスは、ロサンゼルスのボールドウィン・ヒルズ地区にあるクリード家の豪邸でぜいたくに暮らしてきた。設定ではロサンゼルスにある家は、撮影ではペンシルベニア州ハンティンドン・バレー地区の家が使われ、ビークラーはボールドウィン・ヒルズに関して広範なリサーチをおこなった。それについて彼女はこう語る。「ボールドウィン・ヒルズには、レイ・チャールズが住んでいたし、多くのアフリカ系アメリカ人のアスリートたちが住んでいる。だから、アポロ・クリードならここに住んだはず。彼は伝説的な人物なので、私たちはそれにふさわしい家にする必要があったの」
「また、アポロはあの家を 1980 年代に買ったように感じさせる必要もあったの。でも今も当時とほとんど変わらず、大理石とゴールド。明るく、ぜいたくで美しい」とビークラーは続ける。「色彩は中間色を基本にしたので、全体的にクリーム色と茶色で、レザーの高級家具が置いてある。そうすることによって、ロサンゼルスとフィラデルフィアを区別すると同時に、アポロのライフスタイル――アドニスも何年か経験した――をロッキーのそれと区別したの。アポロとロッキーはとても親しかったけど、結局のところ、ふたりの生活はまったく違ったのよ。21 世紀の今でも、あの家の骨格は 1983 年のままなの」
アドニスとビアンカが住むアパートの建物はノース・フィラデルフィアでロケ撮影された。そして、ふたりの初“デート”が撮影されたのは、その近くに実際にある人気店“マックスズ・ステークス”だった。ビアンカが出演するライブハウスも実際にあり、芸術に敏感な人たちが集まるノース・フィラデルフィアのスポット、フィッシュタウンの“ジョニー・ブレンダズ”、そして“エレクトリック・ファクトリー”だ。本作の音楽を担当したルートヴィッヒ・ヨーランソンと、彼がよく組むモーゼス・サムニーが、ビアンカのバック・バンドの一員として出演している。
本作では、３つのジムが重要な役割を果たしており、そのうちの２つはファンにはなじみ深いものだ。まず、デルファイ・ジムは王者アポロ・クリードの本拠地であり、『ロッキー３』でクリードがロッキーを鍛え、本作ではアドニスがダニー・“スタントマン”・ウィーラーと出会う。そしてマイティ・ミッキーのボクシング・ジムは、かつてロッキーがミッキーとトレーニングを積んだ場所であり、今はレオ・“ザ・ライオン”・スポリーノがトレーニングをしている。マイティ・ミッキーのジムの

内部は、フィラデルフィア郊外のチェスターにあるマスト・ファイト・ジムで撮影され、外観は、「ロッキー」シリーズで使われたのと同じノース・フロント・ストリートの建物である。
本作で初登場となる３つめのジムは、ケンジントンのノース・フィラデルフィア地区にあるフロント・ストリート・ジム。ロッキーは、アドニスに集中させ、また、好奇心の目から遠ざけるために、彼をそこで鍛える。
「フロント・ストリート・ジムを見たとたん、ライアンが、『これだ、ロッキーがアドニスを連れてくるのはここだ』と言ったの」とビークラーは説明する。「そして、あのジムの歴史と構造のおかげで、私たちはあまり手を加えずに済んだのよ。さらに、それまで一度も撮影で使われていないという点もよかったので、あのジムを見つけることができてほんとうによかったわ。何枚かポスターを新しく作って貼っただけ。雨漏り用に天井からぶら下がっているペンキのバケツから、スピードバッグが側面に縛り付けられている様子や、梁の木材からサンドバッグが古い鎖でぶら下がっている様子まで……見るとすぐに、それが違うタイプのトレーニング・ジムであることを感じさせられたの」
それら３つのジムをはっきり区別するため、ビークラーはそれぞれを特徴づける配色を考えた。「デルファイは、ロサンゼルスのジムらしい赤と黒。マイティ・ミッキーはゴールドと黒。そしてフロント・ストリートはほぼ全体的に赤、白、青にしたの」と彼女は言う。４つめのジム、“プリティ”・リッキー・コンランがトレーニングをするリバプールのホリデイ・ジムには、やはり赤と白と青が使われたが、「でも、後ろの壁に特大のユニオン・ジャック（英国国旗）を掛けたわよ」とビークラーは指摘する。
リバプールのシーンの大部分はチェスター各所で撮影された。シュラー・ジムが代役を務めたコンランのジムは、アドニスがトレーニングするフロント・ストリートと全体のテーマが反響し合うべくデザインされた。「私たちは、アドニスとリッキーが本質的に同じような背景をもっていることを見せたかったので、この２つのジムの配色は同じだけど、それ以外は違うの」
「ロッキー」シリーズを継承しているものとして、「“エイドリアンズ”の撮影は、サウス・フィラデルフィアのビクターズ・カフェでおこなったの。それは『ロッキー・ザ・ファイナル』で使われたお店よ」とビークラー。ロッキーならきっと、あまり改装したりはしないだろうという認識のもと、ビークラーも、ほんの何か所かに芸術的な手を加えた以外は、いじらなかった。
スポリーノとの対戦会場には、テンプル大学の音楽堂が使われ、アドニスとコンランのリバプール戦は、フィラデルフィア南部のサン・スタジオズで撮影された。そこはエバートン・フットボール・クラブの本拠地グディソン・パークに変身し、巨大なグリーン・スクリーンが置かれて約 1000 人のエキストラが参加。視覚効果チームがのちに、残りの観衆をポストプロダクションで加えた。試合前の記者会見シーンは、エルキンス・パークのエルキンス・エステートで、試合前のロッカールームのシーンは、フィラデルフィア・ユニオン・MLS サッカー・スタジアムで撮影された。
クライマックスの試合で、コンランはキルト・タイプのトランクスをはいている。演じるアンソニー・ベリューは通常、シンプルなボクシング・トランクスをはくのだが、この点についてクーグラーはこう語る。「コンランのトランクスにも、アンソニー自身のいつものトランクスにも、アンソニーが大ファンのサッカー・チーム、エバートンのエンブレムが付いているんだよ」
クーグラーは、衣装デザイナーのエマ・ポッター、アントワネット・メッサンとともに、コンランのトランクスにキルトを選んだのだが、その理由をこう説明する。「アドニスはきっと伝統的なトランクスになると分かっていたので、コンランのほうは派手なスタイルにしたかった。それで、いろいろなデザインを検討し、リッキー・ハットン、エイドリアン・ブロナーからヒントをもらったんだ。彼らは、スパルタ戦士のスカートのような衣装で登場してきそうな派手なタイプのボクサーたちだ」
アドニスの場合、トランクスは伝統的なもので、グローブも一見、通常タイプに見えるが、演じるジョーダンに用意されたグローブはそうではなかった。「マイケル用には、特別仕様のグローブを作ったんだ。サイズは通常のボクシング用グローブなんだが、もう少しクッションのある素材でできている」とクーグラーは明かす。
フィラデルフィアは、“兄弟愛の街”と呼ばれる。その街での撮影でクーグラーがとくに気に入った点のひとつは、やはり兄弟愛だった。「僕はあの街の雰囲気が好きだ。僕自身の出身地（カリフォルニア州）オークランドにとてもよく似ていて、人々は地元のスポーツ・チームを愛し、自分たちの街を誇りに思っている。フィラデルフィアの音楽文化もとても盛んで、ビアンカというキャラクターを通して、僕らはそれをこの映画でも生かすことができた。ビアンカ役のテッサと、我らが作曲家のおかげだよ」
クーグラーとは『フルートベール駅で』でも組んだルートヴィッヒ・ヨーランソンが本作でも音楽を担当し、テッサ・トンプソンがビアンカとして歌う数曲を作った。「架空の話題のアーティスト用に歌を作るというのはやりがいのある、しかし難しい仕事ではあるけれど、ライアンがビアンカにどんな曲を思い描いていたかが分かったので、テッサの起用が決まるとすぐに、彼女とともにスタジオに入ることができた」とヨーランソンは語る。「僕たちは８曲ほど作ってレコーディングし、その中からライアンが気に入った曲を映画用に選んだ。あれはテッサにとっても、僕にとっても特別な体験になったよ。彼女の音楽を通してビアンカというキャラクターができていくのを直接見て、聞くことができたんだから」
ヨーランソンは、本作の音楽自体の作り方に関しても、ユニークなアプローチをとった。「僕はいつもライアンに刺激を受け、型にはまらずに考え、自分がほんとうに信じているものを創り出すようにしている。今回、僕が最初にやったのは、あるボクサーのトレーニング中の音を収録することだった。その音を、この映画の音楽のベースにするため、音楽的要素に変える目的があった」と彼は説明する。「それらの音であれこれ試したあとで、僕はすでに作っていた愛のテーマのひとつをアレンジし直し、いくらか現代的な要素と、強力な主旋律のある、より大きく、より激しいオーケストラ・サウンドにした」
そしてもちろん、「ロッキー」シリーズの音楽についても考えなければならなかった。「僕は、『ロッキー』シリーズの音楽を担当したビル・コンティのスコアを詳しく研究し、彼がジャズとクラシックのハーモニーを組み合わせた手法からインスピレーションを受けた」とヨーランソンは続ける。「この映画では、『ロッキー』で使われた音楽を、クライマックス・シーン１か所以外で使うつもりはなかったが、年をとったロッキーをどう音楽で表現するかについてライアンと話し合い、エイドリアンの愛のテーマを使うことを思いついたんだ」
人生の多くの時間を「ロッキー」シリーズに影響を受けて過ごし、自ら、その中に飛び込む決意したクーグラーは、これほど愛されているシリーズの新たな一章を、ようやくスクリーン上で観てもらえることに胸を躍らせている。そして、そのストーリーをどうしても語りたいと思った彼の気持ちと同じぐらいの熱さで、映画ファンが観たいと思ってくれることを願っている。「僕は物心ついてからずっとロッキーのファンだった」と彼は言う。「だから、あの映画のことはどれもよく知っている。この映画で、僕らはその精神を捉えられたと思うし、ファンが楽しめる新しい要素をもたらせたと思っているよ」

WARNER BROS. PICTURES
©2015 Warner Bros. Ent. All Rights Reserved

© 2015 Metro-Goldwyn-Mayer Pictures Inc. and
Warner Bros. Entertainment Inc. All Rights Reserved